

## 何が学習者の文化的気づきを深化させるのか —短期訪日日本語研修における実践から—

野畑理佳 (国際交流基金 関西国際センター)・市岡香代 (国際交流基金 日本語試験センター)・和泉元千春 (奈良教育大学)

### 1. 調査の背景と目的

言語教育において文化を扱う試みでは、文化的気づきの深化は教育的価値を持つだけでなく言語習得への手助けとなる (Tomlinson and Masuhara 2004)。このような気づきは、本実践を行った短期訪日日本語研修においても、内省を促す機会を通じて意識化されている。しかし、実際には学習者の気づきがうまく深化する場合と深化しない場合が見られる。そこで本研究では学習者へのインタビューを行い、なぜそのような違いが生じるのか考察した。

### 2. 短期訪日日本語研修の枠組み

本研修は海外の日本語履修大学生を対象とした 6 週間の研修であり、交流会等の体験プログラムの提供や、多国籍の学習者との意見交換・インタビュー活動を通して日本に関する事象を複眼的に捉える機会を設けている。さらに体験を振り返り言葉や文化について気づきを記録し、その気づきをクラスで共有する機会を通じて学習者の内省を促している。

### 3. 調査方法

2011 年実施の研修参加者のうち、N1~N2 (JLPT) レベルの学習者 12 名に日本文化への気づき、自文化について考える機会、他者と気づきを共有する機会について問う半構造化インタビューを実施し、SCAT 分析を行った。

### 4. 結果

#### 4.1 学習者 A の場合

A の学習動機は伝統的な日本のイメージに支えられていた。来日後 A は自身の関心に直結した複数の体験を通じて内省を繰り返し、既存イメージの修正だけに止まらず、自国への肯定感や日本という枠組みにとらわれない視点を持った。このように A 自身が目標文化

のイメージや自己の関心を明確に意識し、それが研修活動と必然的、偶然的に強く結びついたことが文化的気づきのきっかけとなった。

#### 4.2 学習者 B の場合

B は周囲からの影響もあり、自身でも日本文化に受容できない部分があることを認識していた。しかし来日後の経験を通して、受容できる部分が増すとともに、日本文化に対する態度がより明確になった。それにより自身の学習動機や来日理由について考え自己の学習経験を肯定し、より多角的に自文化・目標文化を捉えることの重要性に気づいた。このように、自己と目標文化との関係性を意識化したことが文化的気づきのきっかけとなっていた。

#### 4.3 多文化環境での共有の重要性

一方インタビューでは、新たに得た文化的知識に対する印象、あるいは既存イメージ・知識の修正や確認についての語りを中心となり、文化の多様性や重層性への発展が見られない学習者もいた。しかしこのような学習者も多文化環境での学習の意義を感じており、その経験や気づきの共有は多文化的な視点や自文化の再認識につながる可能性を持つ。

### 5. まとめ

本調査では文化的気づきのきっかけとなる要素をインタビューから探ることができた。気づきの深化には、滞在中の経験と個々の学習者の背景 (関心、学習目標、学習動機、過去の異文化経験等) に関する情報とを積極的に結び付け、それを多文化環境でピアと共有するしなやかさを研修に取り入れることが必要である。

#### 【参考文献】

Tomlinson, M. and Masuhara, H. (2004) Developing cultural awareness, *Modern English Teacher*, 13 (1), pp.5-11